

楽しい学び *de* クラスをつくる



大滝 文平

Vol.9は?
前号に続き!
特別企画
第2弾

「子どもがキラキラ輝く! 楽しいクラスをつくる!」

「学校生活と日常の学習を関連づける手立て」を紹介します

「おはよう!」、子どもたちが挨拶をしながら元気よく教室に入ってきます。子どもは自分の席に着くと、まず、提出物を提出ボックスに入れに行きます。

「ねえ、昨日の宿題この意味わかった?」「あ、それね!わたしも……」、提出ボックスの周りに子どもが集まってきます。すると今度は、

「先生、今日の社会科の『お宝資料』つくってきた。これ、よろしく」

「あ、わたしもこれお願ひします」

「え、調べてもよくわからなかつた。何で調べたの?見せて~」

先生の周りにも子どもが集まって何やら話をしています。そういううちに、

「今日は朝読書だ。おーい、みんな時間だよー」一人の子がみんなに呼びかけています。10分後、「朝読書を終わりにして朝の会をはじめます」と日直さんの声。子どもも教師も読書タイム!



これは、当たり前の日常です。朝から子どもたちが自然と関わり合っている様子が感じられます。その時に教師は、何をしているのでしょうか?あまり見えてきません。しかし、このような子どもの姿が表出するために、教師はさまざまな手立てを講じ続けています。今号では、日常の学校生活が豊かになるための教師の役割について考えていきます。ある意味「楽しい学び *de* クラスをつくる」の根幹のような特集です。前号に続いて、いつもの先生方による、子どもがキラキラと輝く!学級経営のエッセンスを紹介します!

日文のWebサイト

日文



vol.09 は!

子どもがキラキラ輝く!
学校経営のエッセンスが
いこはい!



心が動く、その先へ。

日本文教出版

「子どもがキラキラ輝く！ 楽しいクラスをつくる！」

「担任として『楽しい』クラスをつくりたい！」、教師の誰もが願うことです。子どもにとっての「楽しい」とは、どのような姿を思い浮かべますか？この「姿」を思い浮かべることが大切です。その「姿」は子どもによって違うかもしれません。私は、学びの場面で輝く姿こそが「楽しい」と想像します。その姿に迫るために、全体や個に応じて、さまざまな手立てを講じ続けています。

「楽しい」姿にせまるための教師のスタンス3か条

- ① 子どもの知的好奇心をくすぐれ！
- ② 教えない意地悪になれ！
- ③ 子どもと子どもをつなぐ「糊」になれ！




① 子どもの知的好奇心をくすぐれ！

司会の子ども：「次は先生の話です」
さあ、担任の教師の出番です。どんな話をしますか？朝の会や帰りの会、学級会など、教師が話す機会は多くあります。時間も限られているからといって、事務連絡だけになってしまいか？長期休業が明けた最初の話、「先生は〇〇に行ってきました。〇〇を見て感動しました」、単なるスピーチになってしまいか？私は、子どもが思考したり活動したりする「知的好奇心スイッチON！」になるように話しています。

T「昨日、犬小屋の前を通ったら…」
T：黒板に「危犬」と書く。
子「えっ、どういうこと？」
Aさん「なるほど！」
T「Aさん、説明して」Aさんの説明～
子「面白い！わたしもオリジナル熟語を考えてみよう」



② 教えない意地悪になれ！

これは、①の知的好奇心につながります。子どもが自分で考えれば解決できることを教師が教える必要はありません。「先生の意地悪がまた始

まった」、何度も言われたことでしょう。「いやいや、先生が教えたあの大切な考える力をうばうから、それこそ意地悪だよ」。

わからないを教える「優しい先生」になってしまいか。子どもとの関係性を築いていく中で、成長する過程（④めざすその子の姿）を常に意識したいものです。すると、対応に違いが出てくることでしょう。そして、自分の力で解決できた時の子どもの表情はもちろんキラキラですね。



③ 子どもと子どもをつなぐ「糊」になれ！

教えないと同じく、「それ、〇〇さんも同じことで困っていたよ。どうなったかな？聞いてみたら」。子どもどうしがつながる機会を増やしていきます。つながるきっかけを教師がつくって促すのです。普段の「仲よし」を学びの場では持ち込ませず、「いかに多くの子と関わりその関わりのよさを実感できるか」を考えて手立てを講じています。その一つとして、当番活動の表があります。朝活動、給食、掃除、それぞれの当番を表にして毎週代えていきます。多くの子が必然的に関わることがねらいです。参考までに二次元コードを上部に載せておきます。当番のネーミングも子どもと考えました。



楽しい学びのクラスをつくる 編集人？

大滝 文平の「教えて 子どもが輝くクラスづくり！」

（横浜市立森の台小学校）



冒頭のような子どもの姿を育むために、私が一日を通して徹底していることを紹介します。まずは、子どもの登校！

① 教室INは担任が一番目！

子どもを温かく迎え入れることから一日がはじまります。子どもの登校前に教室でスタンバイ！年度初めは心がけていても、気がついたら……ってことにならないよう徹底していきましょう。ここで担任が心がけるのは三つ。

- ①「おはよう」視線を合わせて言いまくる！
- ②子どもウォッチング！（今朝の様子は？）
- ③極力、指示は出さない（聞き役に徹する！）

子どもがいちばん「素の姿」を見せてくれる朝の時間は、キラキラ輝く要素がたくさん詰まっています。逃したくない大切な時間です。

② お宝資料！で朝から学びがはじまる

特に、社会科（または総合的な学習の時間）では、子どもが調べて伝えたいことを「お宝資料」と題してまとめたものがあります。当日の朝に出されたものを、私が児童の数だけ印刷しています。



これは宿題ではありません。授業の開始前に印刷したものを持ってきた子どもに渡しておきます。

授業の場面で「わたしの『お宝資料』を見てください」と発言する際に配布すると、発言を支える役目を果たします。これは、タブレット端末でも効果的に活用できそうですね。

また、朝に提出することで、子どもどうしが調べたことを話題にするなど、ちょっとした学びがはじまります。また、友だちの頑張りを受けて、「今度は自分も調べてこよう」という相乗効果も

生まれます。学校生活のあらゆる場面で、学びと関連づけるように意識させます。こうした日々の積み重ねが、子どもの本質的な「楽しい」に迫ることでしょう。

③ トイレに行ってきます！？

授業中に「トイレに行ってもいいですか？」と子どもが聞いてきたら、何と答えますか？私は「ダメです！」と即答します。何て私はひどい先生でしょう。人権的にも……。

事前に「授業中は大切な学びの時間です。あたり前だけど休み時間のうちにトイレには行っておきましょう。それでも行きたくなることがあるのは当然です。そんな時は『トイレに行ってきます』と言いましょう。だって行かないと大変でしょう。私は『行ってらっしゃい』って言いますよ」と伝えています。「～いいですか」ではなく「～します」。これは自分で判断し、自分から行動する大切な姿です。学びの中でも主体的な姿を育むにつながると思います。

④ 声をかけ合うためにまず聴くのです！

活発に意見を伝え合う姿が溢れるクラス。そのためには伝える力を育まないと……。意見を上手に言える子を褒めて、みんなも言えるようになってほしい。私は、それ以上に「聴いている子」を褒めます。「仲間の話を聴ける子は（心が）優しい人です。だから人の話に相づちを打ったり反応したりできます」。子どもが発言している時には、発言している子ども以上に、周りの子どもが聴く姿をウォッチングします。『聴き合う』集団であることが、子どもの安心につながり、「聴いてくれる仲間だから、自分も伝えよう」と発言する子が増えていくことでしょう。



「愛のチョークで引田が斬る！」 でおなじみの

引田 雄士先生の「教えて 子どもが輝くクラスづくり！」
(横浜市立あざみ野第二小学校)

教室に入ると元気な子どもの姿……そこから下校するまでに子どもとのたくさんの関わりがあります。「すべてが手立てだ！子どもとの関わりを学習につなげよう！」スタート！

1. 教室に入る！そこから手立てがスタート！

～朝、子どもが教室に入ってきたら～

Aさん 「おはよう」。ノートを返しながら、
T 「おはよう、Aさんは、Bスーパーに
行ったんだ。どんなところだった？」
Aさん 「とても広くて、2階まで商品を売っていたよ」
T 「そうなんだね。今日の社会の時間にみんな
に伝えたら、学習が楽しくなりそうだね」

手立てのポイント①

ここでのポイントは、ノートの内容について子どもと1対1で話すことです。朝の時間は、じっくりと学習の内容を話せる時間です。子どもと話すことによって、具体的な内容を把握できます。難しいことではなく、楽しい内容を話すことで「今日の授業は楽しそう！」と子どもが思ってくれたら、うれしいですね。

2. 朝の会で子どもの行動を伝える

～朝の会の教師の話で～

T 「このジャムどうしたと思う？」
クラス 「おいしそう！どうしたの？」
T 「実は、Aさんがスーパーの調査に
行ったときに買って来たんだって」
クラス 「すごい！自分で買ってきたんだね！」
T 「スーパーがどうだったか、社会の時間に聞いてみようね」

手立てのポイント②

ここでのポイントは、朝の時間に話の一部だけを伝えることです。そうすることで、学習が始まると、「Aさんもっと教えて」と子どもたちが学びをつくり出します。

3. 授業終了後は手立てのチャンス！

～授業終了後～

T 「Aさんは最後に手を挙げてたけど、何を伝えたかったのかな？」
Aさん 「スーパーに何が置いてあったのか、もう少し伝えたかった」
T 「そうしたら、黒板に書いておいて！写真を撮って次の時間に発表できるかな？」
Aさん 「うん」



手立てのポイント③

授業の終了後は、子どもと深く考えるチャンスです。発表できなかった子どもとコミュニケーションをとることで、内容について深く考え、次の時間につなげられます。特に、黒板の前で話すと黒板を使って話したり、書いてもらったりできるのでよいです。

4. 給食でたくさん授業の話をしよう！

～給食と一緒に食べているときに～

T 「みんなはCスーパーにはよく行く？」
Dさん 「あまり行かないよ」
T 「どうして？」
Dさん 「車で買い物に行くから、Bスーパー・マーケットに行くよ」
T 「そうなんだね。駐車場は広いのかな？」
Dさん 「とても広いよ」



手立てのポイント④

ここでのポイントは、いろいろな話題の中に学習の話を入れることです。給食では、子どもは生活経験の話をたくさんします。その中に学習の話を入れていくことで、子どもが継続的に学習のことを考えていきます。なかなかクラスの中で伝えられない子どもからも、話を聞くことができて、授業につなげられます。



MASAYA presents

Masaya

Masaya

僕も、僕以外も。でおなじみの

山本 雅也先生の「教えて 子どもが輝くクラスづくり！」
(横浜市立港南台第三小学校)

社会科の学習では、人物を取り上げて学習を進めことが多いと思います。これは、社会の中で活躍する人の生き方から多くのことを学ぶことができるからです。

今回は、社会科の学習で人の営みを取り上げることを通して、学級集団の向上や人間関係の形成につなげることについて考えていきましょう。子どもたちに「どんな人と出会わせるか」「どんな問題を設定しようか」、「教師の思い」と「子どもたちの問題意識」を大切にして、学級集団の向上をめざした実践を紹介したいと思います。



4年生 ごみのゆくえ

1. 子どもの実態をみとろう

相手の気持ちを考えられるようになると
いいな。
自分中心に考えてしまい、トラブルになることがあるな。



子どもたちには、自分の考えや行動がごみ処理に関わる人へどのような影響を与えていているかについて考えてもらいたいと思い、4年生の「ごみのゆくえ」の単元を設定しました。

2. 指導計画を立てよう

○学校のごみの量はどのくらいあるか調べよう。

➡ わたしたちの出したごみは、どうなるのだろう。

○どんな分別をしているのかな。

○出されたごみは、どのように処理されるのだろう。

3. 実践しよう

学習を進めていくと、ごみ集積所に残されたごみがあることに気づいた子どもがいました。そのことを子どもたちにたずねると、

- ・分別を間違えたのだから、置いていかれても仕方がないよ。
- ・置いていっても、出した人が取りに来ないから残っているんじゃないの。
- ・置いていくとまちが汚くなってしまう。
- ・がんばって分別したのに、置いていかれると悲しい。

というように、さまざまな考えが出てきたので、集積場所にごみが残るのに、どうして分別シールをはってごみを置いていくのだろう。

という学習問題を設定しました。
そして本時では、「分別の間違による事故(けが・収集車の火災)」と「もやすごいみ中にふくまれる資源物の割合」の資料を提示しました。それを見た子どもたちは、

- ・出し方を間違えたのはわたしたちなのに、収集車の人ががをするのはよくない。
- ・もやすごいみの中には、たくさん資源になるものが含まれているから分別はしっかりしないといけないね。

といった、相手を大切にした発言や自分たちの行動を変えようとする発言をした子どもがたくさんいました。

4. ふり返る

社会科の学習をもとに、学級生活について振り返りました。「自分の行いを人のせいにしてしまったことがある」「他の人の気持ちを大切にしたい」など、これから的生活に生かすことができる発言がありました。「**学びを通して学校生活に生かす、求めていた姿**」です。

社会科の学習で出会う方から聞く話や取り組む姿勢などは、子どもたちにとって豊かな経験になります。そして、社会科で学習したことが実生活で生かされ、子どもたちの学級での生活が豊かになっていくと思います。社会科の学習を通して学級集団を育てていきましょう。



YUKIKOの部屋 Check point!

武藤 由希子先生の「教えて 子どもが輝くクラスづくり！」
(横浜市立本牧小学校)

子どもたちの気づきを大切に！

日々の学校生活の中で、子どもたちはさまざまに学びをしています。授業中だけでなく、休み時間、給食や掃除、家や地域での出来事を思い出して……など、いろいろなことが学びにつながっていきます。教師は、どのような支援ができるでしょうか？その時の状況やその子によって変わるので、正解はないかもしれません。

例えば、子どもたちが日常で持った疑問に教師がすぐに答えたほうがよい場合もあります。それでも、私はできる限り子どもたち自身が気づいたり、解決したりできるようにしていきたいと思っています。

2年 生活科 「ぐんぐんそだて おいしいやさい」

1. 子どもが自ら気づくことができるよう

単元のはじめに、どこに野菜の鉢を置くかを悩みました。子どもが登下校時、休み時間に観察や世話をしやすい場所がそれぞれの学校にあると思います。私は、子どもたちが日々通るピロティ前の通路の横に置くことにしました。

【朝の登校時】

教室に来ると、子どもたちは自分の野菜について気づいたことを話します。「さっき見たら、お花が咲いていたよ！」「ピーマンなんだけど、くきのところは紫になっていたよ！不思議！」「お花が枯れちゃったんだけど、そこから小さい赤ちゃんが出てきたよ！かわいい！」



【下校時】

「もっともっと大きくなるといいな」「明日はミニトマトができているといいな」「出てきた枝豆を持って帰って家族に食べてもらいたいな。持って帰るね！」

下校時に、子どもたちは明日の野菜の変化を

楽しみにしたり、実を大切そうに持ち帰ったりしていました。

子どもたちが授業中だけでなく日常生活で目につくところに鉢を置くことで、教師が「見てね」「お世話してね」と言わなくとも、自分から進んで行動していました。子どもたちはお互いにその姿を見て真似をし、たくさんの学びをしていました。



2. 子どもが自分で解決できるよう

野菜を育てていく中で、疑問や悩みが出てきました。
「大きくなってきたんだけど、倒れちゃう。どうしたら倒れないかな？」
「葉っぱに虫がついていたよ。葉っぱが食べられちゃう。どうしたらいいのかな？」
「どのくらいの大きさになったら実をとったらいかな？」

そのような日常で出てきた子どもたちの疑問に、「どうしたら解決するかな？」や「どうしたい？」と聞きました。

すると、
「野菜に詳しい〇〇さんに聞きたい」
「本やインターネットで調べたい」
「みんなに相談したいな。次の生活科の時にみんなはどうしているのか聞きたい」と、一人の疑問や悩みをクラス全員で考え、自分の野菜のことだけでなく、友だちの野菜についても興味を持つ子どもがたくさんいました。自分の野菜と比べ、同じところや違うところを見つけている子どももいて、より自分の野菜への愛着を深めていったように思います。

このように、授業中だけでなく日常生活での子どものつぶやきを見逃さず、自分で解決していくことを繰り返していくことで、さまざまなことを自分で、クラスみんなで解決していきたいと思う子どもになっていくのではないかと思います。



社会の中心で石川が大きく叫ぶ！ でおなじみの

石川 和之先生の「教えて 子どもが輝くクラスづくり！」
(横浜市立日枝小学校)

「でも」「でも」大会を、朝の会で！

「本当に、そう？」

「おかしいなあ、そうなのかなあ…」

「すごいけど、なんでだろう…」

日常生活にたくさん転がっているハテナ探し。ぜひ、朝の会でやってみませんか。友だちのハテナ発表に対して、「ハテナ返し」もまた面白い。「なるほど、おかしいねえ」と、共感することも素敵ですが、「でもさ、そもそもココってどうなのかなあ」も、ワクワクする。

そんな、『『でも』『でも』大会』が繰り広げられる教室をつくってみましょう。朝の会の続きは、休み時間に先生や友だちの机を囲んで。給食時間には食事を楽しみながら。下校途中に友だちと話しながら。これらのこととは、必ず、日常の学習にもつながっていきます。

教材研究は「子ども研究」から。あの子のハテナを次の単元で。あの子のハテナは次の次の単元。そんな思考をめぐらせながらの通勤は、私たちも次第にワクワクしてくるはずです。

育てたい、「でもさ…」に耐えられる粘り強さ

「でもさ……」を言われることは、子どもたちにとって結構つらい。考え続けなければいけないから、面倒だとも感じてしまう。しかし、実際、世の中のさまざまな社会的事象は解決できていない難しいことばかり。この『『でもさ……』に耐えられる粘り強さ』こそ、ぜひ、日常の生活の中で育てていきたいです。

考えても考えても「わからない」となる学びもあることでしょう。社会科の授業では、「どうしてこんなに大変なのに、この人はここまで取り組んでいるのだろう」といった永遠に続く問い合わせが生まれることもしばしば。そんな時、「自分たちがこんなに考えてわからないこと」にチャレンジし続けている『大人』って、本当にすごい！こんなかっこいい大人になってみたいな

子どもたちが、そんな思考ができると、とても素敵です。



みんなで楽しく学ぼう！ 先生たちの勉強の場(今年で9年目)紹介！

社会科を中心とした、子どもが主役の学びを創造し合う場。それが「北学場(きたまなば)」



参加費
無料！



遅刻・早退
OK！事前
申し込みも
不要！

北学場 〈連絡先〉大滝 文平
kitamanaba@gmail.com

横浜市北部(青葉区、都筑区、緑区、港北区)の社会科有志が中心となって発足した、緩やかな勉強の場です。

発足して9年目になりますが、今では横浜市内・市外の初任者をはじめ、経験の浅い先生、中

堅・ベテランの先生、管理職やOBの先生などなど、あらゆる立場の先生方がフラットな関係で、ざっくばらんに語り合っています。ご興味がございましたら、連絡(メール)をいただけると案内チラシを送らせていただきます。



今回の叫び 簡単に納得しない

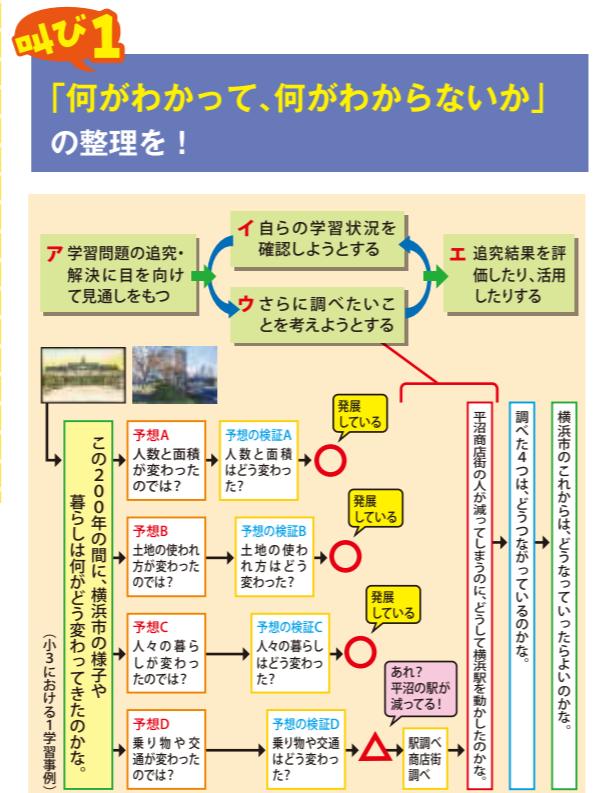
寅子さんのように「『はて?』と疑う発見」を伝え合う朝の会にしてみよう！

友だちの見つけたハテナに対して、「どうしてだろう？」と真剣に考え合う教室づくりこそ、学校生活と日常の学習を関連づける最大の手立てだ！

NHKの連続テレビ小説「虎に翼」では、主人公の寅子さんが「はて？」と立ち止まって思考が始まる場面がたくさんありました。

日常生活の中の「はて？」探し。「はて？」発表。「はて？」の聞き合い。そんな営みを大事にする学級経営をしたいものです。「はて？」は、学校の登下校時や、放課後、休日の旅行先で、テレビを見ていて、などの日常生活から見つけられると素敵です。次第に、授業での学びにつながっていくとさらに素敵。

クラスの子ども4人が住んでいた壁面が赤煉瓦模様のマンション。実は、二代目横浜駅のあった場所に建てられたマンションでした。入り口の横に遺構があって、子どもたちはいつも「あれって、何だろう？」と思って生活していました。3年生の「まちたんけん」で見学もしていたので、多くの子どもたちの「はて？」でもあったのです(今の横浜駅は三代目。初代の横浜駅は今の桜木町駅付近です)。



3年「市の移り変わり」の実践では、二代目横浜駅があった当時の写真と、同じ場所に建てられているマンションの写真を比べ、「この約200年の間に横浜市の様子や暮らしは何がどう変わってきたのかな」という単元全体の問い合わせを子どもが設定。その問い合わせに対して予想する中で、

- ①人数と面積はどう変わった？
- ②土地の使われ方はどう変わった？
- ③人々の暮らしはどう変わった？
- ④乗り物や交通はどう変わった？

と、四つの学習計画を子どもとつくります。

子ども自身が調べる中で、①②③と順調に「わかったこと」が増えています。この調子で④についても……と意気揚々と学ぶ中で、図中にある「△」を子どもが見つけます。横浜市全体では線路も駅も増えているのに、学区内の駅は昔に比べて減っていることに子どもが気づく。あらためて発見した「はて？」です。



呼び2 「～さんのハテナ」を真剣に考え合う教室づくりを！

あらためて発見した「はて？」ですが、さらにそのハテナは高まります。そのきっかけは、Aさんの発言「空き地ばっかじゃん！」。二代目横浜駅が今の三代目横浜駅に移った場所の写真を見たときの一言でした。この「はて？」に、クラスの友だちも真剣に考え合います。

「どうしてわざわざ空き地ばかりのところに移したの？」
土地が安かつたから。今の横浜駅の近くに人が少なくて、にぎやかにしたかったから。二代目横浜駅だとカーブになつていて、線路をまっすぐにしたかったから。ある程度「なるほど！」となる友だちの考え方ですが、簡単に納得しない子どもが数人います。

「でもさ、今の横浜駅に移したら、二代目の近くの商店街のお店が一気に減ったんだよ。納得できない。わたしの家の隣なんか、映画館があつたらしいのに……」

「やっぱり納得できない。二代目横浜駅のままがよかったですのに」

「簡単に納得しない」、これは学びを深めることに対して圧倒的に大切な姿勢です。この姿勢は、授業中だけでなく、朝の会など日常の学校生活の中でたくさん実践して習慣化していきたい。

さて、「納得できない」の発言以降、それまで静かにじっくり話を聞いていたBさんが、横浜市全体の地図を指し示しながら次のように話します。

「大きな駅をつくることで、あちこちに行ける線路を増やしたかったんだと思う」

「横浜市の人口も面積も増えて、とりあえず横浜駅に行けば乗り換えてあちこちに行けるようにしたかった。横浜市の遠くに住む人にとっても便利にしたかった」

徐々に自分なりの解釈を自分の言葉で語り出すようになっていったのです。

「この先生と一緒に学んでいきたい」、そう思いながら授業を受けている子どもたちがいる！「目の前の子どもたちと一緒に学んでいきたい」、そう思いながら授業を行っている教師がいる！子どもと教師が「学ぶべくトル」を一致していると感じる授業にするには……。



呼び3 その先にある「子ども自身が設定する宿題」を目指せ！

いつか、いつか達成してみたい夢があります。「明日の時間割に『宿題はドリルの〇ページ』と書かない」という夢。「教師が宿題を設定しなくても、それぞれの子ども自身が主体的に学んでくるのが当たり前になる」という夢。

その達成に向けて「簡単に納得しない」を合言葉に、学校全体で授業づくりや学級づくりをしてみたい。その際、キーワードになるのは「地域の材をどう学びに生かすか」だと思っています。納得できない、解決したい問い合わせがあるから、もう一度、放課後に地域に出かけて確かめてくる。確かめたことを明日の朝の会で友だちに伝えたいから、ノートにまとめてくる。正確に伝えたいから、文章表現を学んでくる。根拠をわかりやすく示したいから、グラフの書き方を工夫してくる。

「簡単に納得しない」という学びの先に、「子ども自身が設定する宿題」を目指したい。何としても、本気で取り組んでみたい私の課題です。

「簡単に納得しない」という姿勢で大事なことは、子どもも大人も同じ目線で学び続けていくことなのかもしれません。





編集後記

大滝の小言

Vol.9は前号の「学級開き」を受けて、さらにその後を見通した「クラスづくり」を特集しました。共通していえるのは「子どもを主語にしている」ことです。生活科の野菜をどこに置いたら「子どもが」豊かに学ぶことができるかな。ごみの学習を通して「子どもが」日常の生活にどのように生かすことができるかな。このステキなノートを返す時に「あの子が」どんな反応をしてくれるかな。「どの子どもが」今日は「でもさ」というかな。

共通していたのが、日常と学びを結びつけています。登下校の時間や朝の会、給食や掃除の時間、休み時間など、あらゆる学校生活の時間に授業の学びと結びつけられるチャンスがあります。そのチャンスを見つけてそれを生かすための手立てを講じるのが、私たちの役割なのではないでしょうか。あ、このコーナーは小言でした。「お楽しみ会」「○○パーティー」といった学級イベントも「楽しい」でしょう。しかし、日常の「学びが楽しい」ことの中にこそ、子どもの真の輝きがある!!……と私は信じています。

今後も特集のリクエストがありましたら、是非ともお願ひします。



横浜市立森の台小学校 大滝 文平

※本冊子に掲載しているイラストはすべてイメージです。



「楽しい学び de クラスをつくる」では、
みなさまからの質問をお待ちしています!
<連絡先:北学場> kitamanaba@gmail.com



楽しい学び de クラスをつくる (vol.09)

日文教授用資料 [小学校社会]
令和7年(2025年)11月30日発行

編集・発行人 佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261
FAX: 06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33828

日本文教出版株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261 FAX: 06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL: 03-3389-4611 FAX: 03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL: 092-531-7696 FAX: 092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F-B
TEL: 052-979-7260 FAX: 052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1
TEL: 011-764-1201 FAX: 011-764-0690